



津田文庫  
文庫 1  
1639  
1









ちるあけりしとてしるあてし美のた  
 ちやひささうさうあけりしとてたうあやうさ  
 のこりあてのめよきあけりしはあけりし  
 りてあそふあてのぬりあてしとてあおぬ  
 りてあけりしあてのあてりあてのあてり  
 けけりあてしとてえりあてりあてり  
 ちるあてのあてりあてりあてりあてり

めあけりしとてしるあてし美のた  
 うれういあてのあてりあてりあてり  
 けあてりあてりあてりあてりあてり  
 ちるあてりあてりあてりあてりあてり  
 ちるあてりあてりあてりあてりあてり  
 ちるあてりあてりあてりあてりあてり  
 ちるあてりあてりあてりあてりあてり  
 ちるあてりあてりあてりあてりあてり



あみよのひらけらなまのしとよのひらけ  
 ひらけとほめてそのらみよよあていん  
 ちらけいしとらくもけいあひあていん  
 よしとらくもけいあひあていん  
 けいあていんしとらくもけいあていん  
 ちらけいしとらくもけいあていん  
 のいしとらくもけいあていん

りあろーはまをねつたうたを  
 ちまのれちちねいぬしとらくもけいあていん  
 ちらけいしとらくもけいあていん  
 ちらけいしとらくもけいあていん  
 のいしとらくもけいあていん































いざよ。つて。習ひ。つる。物。と。い。ふ。は。何。哉。何。と。伊。は。女。な。ぞ。の  
 類。を。宣。命。の。を。は。先。と。文。と。る。物。と。す。そ。申。す。伊。を。先。と。せ。し。ま  
 を。伊。は。先。と。の。と。習。し。る。を。何。を。先。と。し。得。る。物。と。す。ま。可。得  
 貴。意。と。は。な。れ。ど。の。教。を。後。又。は。先。の。と。文。と。る。物。と。扱。を。は。を  
 け。又。先。と。せ。し。る。と。河。入。お。し。し。た。と。い。ふ。は。な。ら。ず。物。と。す。次。に  
 引。お。初。お。軍。此。文。を。こ。て。も。な。ら。ず。我。る。を。字。音。み。え。習。し。る。も。  
 そ。ん。も。納。り。て。本。を。こ。し。し。る。物。と。す。又。せ。し。る。と。河。入。思。い。い。ん  
 さ。し。く。も。せ。し。る。も。東。鑑。を。こ。し。し。雖。存。思。給。伊。と。せ。し。る。  
 そ。こ。も。納。り。て。と。れ。俗。文。に。存。存。と。し。せ。か。く。し。い。れ。な。く。山。朝  
 ね。し。し。物。と。す。

○消息文を。と。こ。し。し。物。の。つ。し。に。思。ひ。い。ん。の。る。に。昔。乃。武。納。り。な。し

此。を。し。し。る。と。こ。し。し。物。の。つ。し。に。思。ひ。い。ん。の。る。に。昔。乃。武。納。り。な。し  
 初。お。軍。の。許。よ。り。蒲。の。討。者。頼。頼。が。西。國。在。陣。の。ま。と。い。か。れ  
 る。と。し。し。る。と。十一月。十四。日。の。は。つ。と。は。月。と。日。と。を。申。す。と。日。七。と。申。す  
 脚。力。立。ん。と。い。ひ。つ。る。程。よ。け。指。力。が。申。す。信。を。し。し。る。も。あ。い。く  
 承。り。し。早。ね。後。は。先。の。の。形。と。る。と。い。ふ。と。い。ふ。と。思。ひ。い。ん。の。る。に。昔。乃。武。納。り。な。し  
 と。し。し。る。と。い。ひ。つ。る。程。よ。け。指。力。が。申。す。信。を。し。し。る。も。あ。い。く  
 國。の。者。と。も。は。あ。れ。ど。い。て。お。し。し。る。と。い。ふ。と。い。ふ。と。思。ひ。い。ん。の。る。に。昔。乃。武。納。り。な。し  
 よ。て。お。し。し。る。と。い。ひ。つ。る。程。よ。け。指。力。が。申。す。信。を。し。し。る。も。あ。い。く  
 お。の。づ。つ。つ。と。い。ひ。つ。る。程。よ。け。指。力。が。申。す。信。を。し。し。る。も。あ。い。く  
 よ。り。あ。て。者。ん。と。い。ひ。つ。る。程。よ。け。指。力。が。申。す。信。を。し。し。る。も。あ。い。く  
 て。志。を。し。し。る。と。い。ひ。つ。る。程。よ。け。指。力。が。申。す。信。を。し。し。る。も。あ。い。く







方早にふるみなれども。がのまそがー思ふふあれだ。せむたをい  
ゆる敷。うれもがー異れ。ふるもま。そ論を。てういふれだ。後  
ふいむに。じん人あやーむいふ

○まきま英一たる信息案文を。前編より古き物語。づもせり。  
せうそまよせし。何れもたかびく。せねる。五十まの部を。りち。  
ま心を信治より。こつ小後を加つ。ち。後編より古き物語。づも  
よあ。せうそこの敷。を大才抄出。して。そのも紙の文。又翻訳し。  
雅俗二章。づも。出せり。されだかの。まを雅を。信小訳。せり。なり  
け。まを信を。雅又訳。せり。おれだ。表裏にして。互又便。と。ふる。みま  
ー。必。まけ。まに。合。を。さ。る。ご。ー。

○本文より始五節句を。始て。年中大才。を。と。たる。後。各。回。ま。

の雅。用。行。婚。葬。系。の。敷。乃。度。づ。も。た。つ。外。又。持。の。こ。も。り。れ  
つ。信。用。の。文。章。と。も。ま。て。拾。い。入。れ。れ。も。信。用。日。用。の。ま。ぬ。ま。う。が  
ち。て。し。か。ー。ま。ー。く。物。を。ぞ。い。ふ。く。ま。う。ま。文。章。と。れ。る。ま。ま  
も。ま。う。ま。く。れ。だ。又。編。を。つ。ぎ。て。出。せ。づ。く。こ。ま。

天保二年五月







- 冬にさへる舞の文
- 年暮りの文
- 婚礼祝儀の文
- 之役祝儀の文
- 年賀の文
- 縁起を合の文
- 家督の文
- 入学の文
- 妻をいれ持の文
- 仏をいれ招の文
- 末官人舞の文

- 同也
- 同也
- 養子祝儀の文
- 禱言祝儀の文
- 不幸人舞の文
- 出立の文
- 後位の文
- 孝親の文
- 孫お後の文
- 神主人を招の文

下巻目録

- 子日よしの文
- 梅見よしの文
- 春雨よしの文
- 鹿子指の文
- 時鳥よしの文
- 螢を捉ふ文
- 細路よしの文
- 夕立のほろよしの文
- 虫のさるよしの文
- 同也

- 菊草をいれ舞の文
- 鹿子指の文
- 虫のさるの文
- 花見を招の文
- 同也
- 夏の月見よしの文
- 同也
- 同也
- 月見よしの文
- 紅葉の文



- 同也す
- 初冬山を小絶る文
- 吾人よ人を招文
- 同也す
- 川をさへる文
- 醫師を合の文
- 久く舞の文
- 同備用沖文
- 寺樓を出るの文
- 芝居見物の文
- 石を質入の文

- 書を絶る文
- 同也す
- 同季にゆく文
- かくる文
- 瘧疾見舞の文
- 火より舞の文
- 合子備用の文
- 親母子招舞の文
- 喧花接移の文
- 角力見物の文
- 奉公人情状

雅言用文章上卷

○ 乙午始の文

新鷹の法芝居の文  
 有考の法芝居の文  
 芝居の法芝居の文  
 法芝居の法芝居の文  
 乙午の法芝居の文  
 乙午の法芝居の文  
 乙午の法芝居の文  
 乙午の法芝居の文  
 乙午の法芝居の文  
 乙午の法芝居の文

黒澤翁満著

○ 乙午始の文

物皆いとくけし中にも。馬はあつ  
 けられつばうり。めでたうとぞ  
 けり。かきん付し。いづれ  
 めど。や。に。さ。え。さ。た。ま。は。あ。り。も  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。  
 乙。午。の。法。芝。居。の。文。も。







家内も五法徳中と信格  
ト申は不位

○竹千代舞文

一平ゆくと仕は竹千代  
退るに之は色法勇  
勝成法を以てしては  
後存存ん次はあかお智  
徳をばたの九條は好  
こころ下んわ時依法  
あか本何んかばはは

こそ

○竹千代舞文

了のきこも一がましとこなまなま  
きはしきやかや。月のなままはけごら  
きさば。いづち一はづをなやん。すれ  
おまほとらなしとらぬ人。れらあま  
たはる中。おはづら一また一をぬ物  
けりぬ。いづち一はづおが一もまた  
とらば。おまほしはおほしはかまも。あ

口物淫淫了

於の味少もま世分

は井清平法書教書

とこはは入事てとら

し

○回也文

中輪髪有海は身生  
まははるのりつは歴之  
京存存ん早者たる後  
和はははるに身は別

口まましきしはましは月一とら入ら  
れら一と

つらて中にむしきまのりかかか

にまはるのりてはかかかかか

つらてかか

○回也

うんたはらららねはふのり一は持  
まははるのりそなたまのり人。は  
れれ。はらららららららららら  
らららららら。はららららららら  
らららららら。はららららららら



ふれは存存くそふは  
安はくわをり奈何よ  
以取平くは儀存存  
其心定あゝ梅園中  
耳及くは木取く知は  
きは入身存付く略  
儀存儀存あけはた  
也物ほく

花く好物く味客は  
山は道取く下女くは

たりよたふどくれんは  
たらかると。くくくく  
しきかごれは信うなが  
やけさうは付りはい  
かぞふもさくをな  
さるぞか。ゆきま  
がて。げんをくは  
ふはくおれまごこの  
井きさくはくはく  
戸く。はれまかか  
くはくはくはくはく

ふはくおれまごこの  
井きさくはくはく  
戸く。はれまかか  
くはくはくはくはく

深切存存存存  
万は尊儀く存存

○上巳の文

追母存儀存儀存  
望勝上儀法存存  
随ふ内儀離一名  
前く枕存枕相法  
女横台掛法目く  
上巳くは夜河中  
とくは存くは存

まてま。くくく  
形りれぞ。くくく

○上巳の文

月よりたてま。く  
て。あうく。く  
く。ま。ま。ま。ま  
と。人。あ。う。た。よ。  
ま。つ。も。れ。ま。う。  
は。ど。い。れ。く。く。く







遣せし付は初懐ふ  
 此の法振る夏子秋  
 軍法に成り法後と  
 赤い身存し後文  
 未停在るを傍胃  
 双入法後と兼小  
 設後と下を本原  
 笑納て下を本原  
 兼上ははなすは

○月返り

女のくいでや  
 しう。もこそや  
 りんぞとさ  
 根乃ふぐま  
 うぶといや  
 けさものか  
 さかかんあ  
 ーこ

○月をき

之存程も解と  
 入中の之は法  
 入車と兼あり  
 下は通ある  
 初懐ふ初懐  
 又法着るとは  
 法並ふ兼あり  
 ば二年と兼

ちとくぎさ  
 うせおど  
 れうぎ  
 かんまづ  
 かんには  
 けして  
 けりおか  
 かんま  
 なる。正  
 どやあ











○七夕の文

七夕はは從河月か夏  
中納の津水及乞巧  
兼は規式を民号  
ふて下儀をたきしほせ  
甲おほし儀をせけせ  
おまに儀をふか於舞  
菴も娘をま向儀を  
く中交方中おれ付  
法幼女振方おれ法入

○七夕の文

星合れおがつらぬくじにほも  
やうくるよそのいづいをふも  
はしんぞほきしむを巧真かやらて  
にたうきよけよ乃おけんぎさど  
も下が下せよすかきくうもぎた  
まねどやうでけしんまかこかか  
はくそけしきどむらうにいつてふれ  
よいのたむれ物きけふれとちけ  
やきこにともさかおねびらばてお

魂は事な何卒法

来加ら下り殺な友は  
は折奉り下下友を  
未熟そて有し作は  
一笑お替り仁もか  
万千言は翠乃法持  
ら下一書法も向ら下  
車来い子いふ言

回文

女芳深天守望爰法

雅言用文章

いしがもていつういづまにふんけら

おんむきまのまんごらあもけらびら  
ま乃ぬらにおえ一をばいうで法翠  
もくちかてふうをけをたよふか  
やうにいふとすなまけらばやふてな  
めきど。箇書きをんはふらり帝か。うき  
けをたたまむむふん。里おんあふまや  
こそかこ

回文

ぐよはアヤていせくして夫乃らふま

雅言用文章







結魂糸こころのゆて種  
極まで有るにけりしは  
於此こそおれを後をこ  
せは老くは後何やと  
ね又何事と過るに利  
緒力持とら向は後と  
下は久悼は老人杖方  
支しと上と下を在れ  
さる一統は極と二重を  
まゝに下を極に物お

たしづきやうや。かへへ  
んましやうや。かへへ  
ちのひのひはだくには  
例もものやうきしは  
つ利結のこものいひ  
ふんをぞとてはねよ  
まづばや。たがふくま  
はらへへへへへへへ  
ゆえにや。いへへへへ  
しうへへへへへへへ

よあむ更本極くは毛  
残異はまをゆるは万  
多しは得たは法は極  
何ふんは法をいふ

○同也

業は法は使方せは老  
は法は後若後利結と  
能下二層及有味は老  
は法は後若後利結と  
ふはしやうと法をい

かちてせよとまづりね  
たはけしんとてや

○同也

は法は後若後利結と  
能下二層及有味は老  
は法は後若後利結と  
ふはしやうと法をい



きつ 丹生口糸かめ内打あ  
れ収い後い後い板と紙  
きあきれけ通具ひね  
危相中い刺毎い付只  
も欠事い旅いあて有  
い作万薄著い流除き  
法二男扱法同い下なる  
付作れそ

○残吾見舞い文

立林い下い一旦い等相

いもまたぐしれをねん。さうしてさう  
こほいけらるや。こいさわつうどぞきまは  
どひいず。けいにもふとまむいよ。あしき  
がーアとんしむやういこそらばあねま。  
あしにういげおさる。きもこどろほまき  
やうもあつひ。ひんちあ天わておさうて。  
相いさういげまうげたふんや。あしどく  
ねふふんこうい

○残吾見舞い文

いこいこいねとらや。あしどくねん

信いけきいおあきり  
あわや中いけけせい  
海除きを存いあ中も  
けい法事唐い聖家法  
きあきれけ通具ひね  
危相中い刺毎い付只  
も欠事い旅いあて有  
い作万薄著い流除き  
法二男扱法同い下なる  
付作れそ

さうもまたぐしれをねん。さうしてさう  
こほいけらるや。こいさわつうどぞきまは  
どひいず。けいにもふとまむいよ。あしき  
がーアとんしむやういこそらばあねま。  
あしにういげおさる。きもこどろほまき  
やうもあつひ。ひんちあ天わておさうて。  
相いさういげまうげたふんや。あしどく  
ねふふんこうい























と有る位の人か年暮  
しは収候と云つ思ふ事  
能きんは是れ取ら下  
歳久矣は収候作也  
は若早しと上

○物収候儀と文

一筆始上は是れ也  
也収候儀は収候は也  
極候儀と云ふ事也  
と云ふと云ふは物相

やと物も云ふ事と云ふ事  
さう云ふ事書けん事。何事も云ふ事  
おぼしめれる。能乃おんお物也。たかこ  
筆入たよお人。はこれの事と云  
と云ふ。と云ふ事と云ふ事

○物収候儀と文

おづの使と云ふ事。はこれの事と云  
おづの使と云ふ事。はこれの事と云  
はこれの事と云ふ事。はこれの事と云  
うたふ事と云ふ事。はこれの事と云

尾好相海子勢事  
毎目か度法儀事  
法令本を極しは儀  
付候又是れ是れ也  
は成作儀と云ふ事  
仍し難うと云ふ事  
是れ作に其法事  
一公助也就しは柳  
表功収候作候事  
は、是れ也云々

と云ふ位の人か年暮  
しは収候と云つ思ふ事  
能きんは是れ取ら下  
歳久矣は収候作也  
は若早しと上  
やと物も云ふ事と云ふ事  
さう云ふ事書けん事。何事も云ふ事  
おぼしめれる。能乃おんお物也。たかこ  
筆入たよお人。はこれの事と云  
と云ふ。と云ふ事と云ふ事  
おづの使と云ふ事。はこれの事と云  
おづの使と云ふ事。はこれの事と云  
はこれの事と云ふ事。はこれの事と云  
うたふ事と云ふ事。はこれの事と云



しよはあつて物にまゐるにまゐる

○養子後継の文

つるれはふんでもせし其こはあつて  
はまはういひに申は付さるるに  
んあつたはあつていひのあつてはあ  
たつたはあつていひのあつてはあ  
はあはあつていひのあつてはあ  
あつていひのあつてはあ  
申に。柱もあつてはあ  
もあつてはあ

○養子後継の文

いぢりは後継の文  
とては後子息は成  
法迎は也目せは  
賢はははははは  
とる左にははは  
あつて成作はは  
存るはははは  
言ははははは

をれづておつてはあ  
こつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ

○之後後継の文

あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ

後継は侍あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ

○之後後継の文

あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ  
あつてはあ







種かゝる至且麻子  
法度は其末度き  
法度中は其末度下  
ふきかゝる其時

○三ノ節ノ文

此文は其時法度  
其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時

一。其時法度其時  
其時法度其時

○其時法度

其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時

其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時

其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時  
其時法度其時























承傳之旨を後世に傳  
せしめんとす。其の根柢  
を及ぶ所を法門下  
にありて、其の付  
法門才の内、其の  
中、早速法承をト  
作有子承、系次承  
存、未承、中承、後  
付法、而信、有法、  
得法、何れも、其の

し。せしめんとす。其の根柢  
を及ぶ所を法門下  
にありて、其の付  
法門才の内、其の  
中、早速法承をト  
作有子承、系次承  
存、未承、中承、後  
付法、而信、有法、  
得法、何れも、其の

以下法指南以下、其  
の法門の、其の法  
學、其の法、其の  
根柢、其の法、其  
法、其の法、其の  
其の法、其の法、  
○其の法、其の法

其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の

其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の

其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の  
其の法、其の法、其の



幼穉に付ては解ぬる  
 友と存ひ不富るを我  
 徒らに成らばは局  
 ふやの百願は苦勞な  
 き存ひ何事は社申  
 はか入ら下法を活ら  
 下いりて如何に  
 存んし何事文庫机  
 送りて事あるは後  
 と右はは同法は人  
 氣を

もくろむては  
 者。社はは後青山  
 事とて人なる  
 て。さうもはは  
 りひては  
 何やと。あ  
 一はは。法  
 あふし。中  
 はまの所を  
 きたる。さ  
 むん。

下を存ひ且又  
 後法于一包  
 笑納て下は  
 下とて法は

さうさ。一  
 けのき。さ  
 けをんとて。  
 法。さ。は  
 くれ。れ。さ  
 め。な。う。て  
 。

○移徒教と支

存即半法善法  
 二法日柄好法  
 法極に半法有

○移徒教と支

ふいむ。ろ  
 け。な。ま。は  
 法。な。れ。を  
 。



振愛法親ては年回生  
 交法儀を存ては  
 日次は物好法礼儀  
 法中世と事と事と  
 電親好教物と事と法  
 最良事存て早速相  
 何得ても仕交作は世  
 却て法云込て度と  
 生と事と相と事と依  
 大法教中と交はけは

くらゐの〜〜〜  
 だ。か〜〜〜  
 つ〜〜〜  
 こつ〜〜〜  
 人〜〜〜  
 中〜〜〜  
 とき〜〜〜  
 ほ〜〜〜  
 け〜〜〜  
 ひ〜〜〜

作正位借

追破け親念相魚如  
 何爰ははれ新爰は更  
 間入法後法衆味  
 下作

○妻とて持文

近法法事也法は建  
 法内通とる在は後極  
 極は法は有  
 世人口と能物

まはあひはがひて

何〜〜〜  
 や〜〜〜  
 ははあまに〜〜〜

○妻とて持文

夫〜〜〜  
 め〜〜〜  
 た〜〜〜  
 して人〜〜〜



















明日より亡父の一肉忌  
 付於極取を程はゆ  
 候引を頼やん依こと  
 夕親族せちる速取  
 と候はれ何事はゆ  
 遠くを在りて申刻  
 以は未かると下り置  
 哉と麻束は湯漬は  
 と申交存存をせと  
 初と格おは入魂と成

けささうさばのまさをたけはけし。  
 一とぐりよれさけはもさ。さうの程か  
 とを供さして。のちれさたのたけん  
 んとしてめん。ぐあをひんごさ。かの  
 ぶつひけるを。はつとれ。か。お。ま。ま。  
 ーか。さ。の。う。い。わ。ん。こ。う。ち。ち。  
 ちむ。を。か。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 は。さ。め。は。て。お。ま。の。お。ん。さ。わ。い。せ。か  
 け。う。れ。ん。よ。ん。あ。ら。ー。程。を。さ。あ。ん。ん  
 ち。め。こ。む。つ。び。ゆ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。

下改條終る良と成  
 出ん程は後付はせん  
 と下はり具位も可  
 とは是とけ厚を致  
 作こと

○神更人招支

と月女島村結さ  
 条終る神位奉幣  
 等々候有村申こ  
 老美為子条仕と百法

物と申ひゆえとこと。ゆつてんあせ  
 中付り。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 う。ま。の。系。と。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 う。で。い。か。ほ。う。ー。ー。

○神更人招支

け里をささく神入ちうさ。月  
 の日といふさ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 て。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。  
 お。と。れ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。











推言用文章上卷終

推言用文章

卷上



